〈仏教とキリスト教〉・対話的関心について

――研究序説――

高田信良

（要旨）〈仏教とキリスト教〉（の比較研究、の対話、等）と題する著作群が、一九六〇年代頃から見いだされるようになってきた。〈仏教とキリスト教〉（の対話、等）という表現は、特に二十世紀後半に顕著に見られるようになった一群の関心を象徴的に表わしている。その関心とは、仏教・キリスト教という二つの宗教を単に並列し両者の異質性差異性を比較考察するものではない。むしろ、仏教・キリスト教それぞれの宗教への関心でありつつ、同時に両宗教の背景・基盤である地域世界の文化（の差異性など）に対する関心でもあるようなものである。また、二十世紀後半頃からは、宗教多元的状況が認識されるようになってきている。宗教多元的状況とは、宗教が複数存在する、さらに、宗教に生きる人々と〈世俗〉の人々との共存状況でもある。そのような宗教多元状況のなかで、仏教・キリスト教が伝統宗教として展開してきた地域世界、つまり、「東洋と西洋」（の宗教・文化・思惟形態など）を対比的に考察する関心と重なり合うようなしかたでの〈仏教とキリスト教〉という関心でもある。

〈仏教とキリスト教〉との表題を持つ個々の著作（著者）の関心は多様であるが、キリスト教徒からの関心（「宗教の神学」的関心）と仏教に生きる人々の関心とでは、一定の差異が見いだされるように思われる。その差異自体も多義的ではあるが、小論では、そのような差異性に注目することで、「仏教とキリスト教の対話」として理解されてきた諸関心（諸思想）の歴史的諸形態を見通す視点を探ってみたい。

(一) 〈仏教とキリスト教〉著作群

〈仏教とキリスト教〉（の比較研究、の対話、等）と題する著作群が、一九六〇年代頃から見いだされるようにな

ってきた。『仏教とキリスト教』（滝沢克己、一九六六年）、『仏教とキリスト教の比較研究』（増谷文雄、一九六八年）、『浄土教とキリスト教――比較宗教哲学論集――』（峰島旭雄編、一九七二年）、『キリスト教と仏教の対比』（岩本泰波、一九七四年）、『仏教とキリスト教の接点』（八木誠一、一九七五年）などである。英語やドイツ語でも、『絶対無　仏教とキリスト教の対話の基礎づけ』（ヴァルデンフェルス、一九七六年、邦訳一九八六年）、『真なる自己の主としてのブッダ・キリスト、京都学派の宗教哲学とキリスト教』（F・ブーリ、一九八二年）、『対話を超えてキリスト教と仏教の相互変革の展望』（ジョン・B・カブ・Jr.、一九八三年、邦訳一九八五年）、『仏教とキリスト教』（N・スマート、一九九三年、英語）、『仏教とキリスト教』（M・v・ブリュック、W・ライ、一九九七年、独語）などである。

〈仏教とキリスト教〉という表現は特徴的である。いうまでもなく、仏教・キリスト教、いずれも、きわめて多様な姿をもつ宗教である。仏教であってもキリスト教であっても、容易には一冊の書物で描写することができないであろう。いずれか一つの宗教であってもそうなのであるから、〈仏教とキリスト教〉として双方の宗教を扱うことは至難と言わざるを得ないであろう。にもかかわらず、これら一群の書が〈仏教とキリスト教〉というように両宗教を同時に関心事とするような表題を掲げるのである。

これらの書に見られる〈仏教とキリスト教〉との関心は、単に、仏教・キリスト教という二つの宗教を単に並列的に見て両者の異質性差異性を比較考察するというものではない。むしろ、〈仏教とキリスト教〉の「出会い」において、両宗教の根底にある関心を互いに照応させるような対話的関心からの論考である。「仏教とキリスト教の対話」という関心は、仏教・キリスト教それぞれにおける宗教的実践的関心であると同時に、また、両宗教に対する思想的文化的理解の関心でもある。そのような意味で、これらの書に共通する〈仏教とキリスト教〉（の対話、等）という表現は、特に二十世紀後半に顕著に見られるようになった一群の関心を象徴的に表わしているものと言える。

二十世紀後半頃からは、宗教多元的状況が認識されるようになってきている。宗教多元的状況とは、宗教が複数存在する、さらに、宗教に生きる人々と〈世俗〉の人々との共存状況でもある。そのような宗教多元状況のなかで、仏教・キリスト教が伝統宗教として展開してきた地域世界、つまり、「東洋と西洋」（の宗教・文化・思惟形態など）を対比的に考察する関心と重なり合うようなしかたでの〈仏教とキリスト教〉という関心でもある。それは、仏教・キリスト教それぞれの宗教が展開してきた地域世界の文化あるいは文明（の差異性など）に対する関心と言えるようなものである。

〈仏教とキリスト教〉との表題を持つ個々の著作（著者）の関心は多様であるが、キリスト教徒からの関心と仏教に生きる人々の関心とでは、一定の差異が見いだされるように思われる。キリスト教側には、〈仏教とキリスト教〉の差異性に注目することを通して自身（キリスト教）の新たな自己理解を追及する関心（「宗教の神学」的関心）が見いだされる。それに対して、仏教側には、宗教・思想・文化などの差異性に注目するところにおいて、自身の宗教・文化・思想の独自性が論じられる。

主たる関心事と関心主体には多様である。主たる関心事は、（a）神学教学的・宗教対話的関心、（b）思想・文化の出会いを視座とする哲学的関心、（c）宗教学的理解に大別することができるだろう。そして、関心主体は、（1）キリスト教徒、（2）仏教徒、（3）哲学者・宗教学者に分けることができるだろう。また、〈仏教とキリスト教〉の出会いは、また、〈東洋と西洋の出会い〉としても理解される。仏教が〈東洋の宗教・文化〉（の一つ）として理解され、キリスト教が〈西洋の宗教・文化〉として理解される文脈のなかで、〈仏教とキリスト教〉という関心が展開される。

(二)〈キリスト教〉「宗教の神学」的関心

〈仏教とキリスト教〉という関心は、宗教間対話（他宗教との対話）という関心や宗教哲学的関心と重なり合っている。宗教間対話（他宗教との対話）という関心は、キリスト教（神学）界で生まれ展開されてきた一面を有する。他の宗教（仏教）界での〈仏教とキリスト教〉は宗教哲学的関心としての側面の方が強いであろう。キリスト教徒にして〈仏教とキリスト教〉に関心を持つ論者は、基本的に、「宗教の神学」（や〈宗教多元主義〉等）という関心に立っていると言える。門脇佳吉や八木誠一などの著作（思索）は、いずれも、（キリスト教）神学的関心からのものである。延原時行『仏教的キリスト教の真理――信心決定の新時代に向けて』（行路社、一九八七）において、「仏教とキリスト教の対話」が「神学・宗教学内の一学問分野」との認識（「はしがき」）が、そのことを率直に表している。小野寺功『聖霊の神学』（春風社、二〇〇三、八一―八三頁）では次のように述べられている。

「従来のキリスト教理解の根底を抜いて、聖霊論的、あるいは霊性的実存論的に深く解釈していくとき、はじめて一切に偏満し永久に存在する生命の法と内的に接しうるのであり、仏教との心からなる出会いも可能になってくるのである。

そのためには、従来の西欧的神観のように、「父と子と聖霊」なる神を、三位一体の窓枠から超越的に仰ぐというだけでは足りず、それがいかなる「場」においてわたしたちに現成してくるのかという神（仏）と人との接点（インマヌエル）が深く問題にされなければならない。なぜならパウロもいうように「御霊（プネウマ）みずから、わたしたちの霊（プネウマ）とともに、わたしたちが神の子であることをあかして下さる」（ロマ、八・一六）からである。

このように考えるとき、鈴木大拙がいう意味での日本的霊性・文化の伝統は、禅浄双方を含めて、聖霊神学的神論

と深く出会い、わたしたちはそこから多くのものを学び取ることができる。

この英知の助けによって、キリスト教徒はキリストの十字架における贖罪の恵みにあずかるだけでなく、聖霊の内在体験によって、自我に死にきって、内在のキリストに対面し、泉が自然に湧き出るように父の懐へと運ばれていくのである。この意味で、聖霊論的キリスト教は、真の意味で日本にとって不可欠な大乗的神学への道を準備するものといえるだろう。」

〈キリスト教〉側の関心の特徴は、基本的に「宗教多元主義」状況のなかでの他宗教への対話的関心であるというところにある。キリスト教とイスラーム、キリスト教とヒンドゥー教、キリスト教と儒教、キリスト教と仏教等々の関心が存在する。それらを担う人々は各々の状況のなかでなされているが、宗教多元主義的状況のなかでの関心というところに共通点を有している。そのようなもののひとつとして〈仏教とキリスト教〉というテーマ設定がなされてくる。それゆえ、シンポジウム・シリーズの中での一つとしてその成果が出版されることが多い。たとえば、『宗教の神学への寄与』（Andreas Bsteh (Hrsg.) Beiträge zur Religionstheologie, Verlag St.Gabriel, Mödling）を見よう。『普遍宗教としてのキリスト教』（一九七六年）、『キリスト教とイスラーム』（一九七八年）、『キリスト教と仏教における救済』（一九八二年）、『キリスト教とヒンドゥー教』（一九八四年）、『キリスト教神学の中心部からの対話』（一九七八年）のなかの、第三巻が〈仏教とキリスト教〉の関心である。執筆者（参加者）は、Fritz Buri, H.Dumoulin, Hajime Nakamura, Yoshinori Takeuchi, Karl Rahner, Wolfhart Pannenberg, Jotiya Dhirasekera, Notker Füglister, Peter Henrici である。また、『他宗教への神学的パースペクティブ』（ルーテル世界連盟、一九九七年）Theological Perspectives on Other Faiths, Lutheran World Federation, 1997）には、他宗教（other faiths）として、アフリカ宗教・仏教・儒教・ヒンドゥー教・イスラームとの対話ワーキンググループが構成されている。いずれにおいても、〈仏教とキリスト教〉との関心は、キリスト教徒の他宗教への関心

というパースペクティブの下に位置づけられているのである。

南山宗教文化研究所は、「第二ヴァチカン公会議の開催後、世界の諸宗教の間での対話が進展する中で、対話の学問的基盤を追求するセンターを設立する」という関心のもと、一九七四年に創設された。「(一)特に、東洋、とりあえず、日本の状況を考慮するような宗教と文化の関係の学際的な研究、(二)キリスト教と世界宗教との相互理解の促進、(三)この分野の学者の養成」が具体的に目指され、「国際性、汎宗教性(エキュメニズム)、学際性」を特徴とした多くの研究がなされている(『宗教と宗教の〈あいだ〉』風媒社、二〇〇〇年)。

『キリスト教は仏教から何を学べるか』(南山宗教文化研究所編、法藏館、一九九九)における関心を見よう。同書は、一九九七年三月二十四日、二十五日、二十六日の三日間、南山大学南山宗教文化研究所において「キリスト教は仏教から何を学べるか」というテーマのもとに行われた第十回南山宗教文化研究所シンポジウムの成果が編集されたものである。キリスト教と他宗教との対話の会議として発想されてきた南山シンポジウムの基本的な関心は、「自分の宗教や霊性のために、他宗教から学ぼうとして、その宗教の優れたところを自分自身の宗教の中でも活かそうとするような精神をもって、初めて深いレベルで他宗教を理解することができる」というものである。

「キリスト教は仏教から何を学べるか」のシンポジウムは、「キリスト教の哲学や神学を志しながら、強く仏教にひかれ仏教や西田哲学の影響を受けたキリスト教徒」を中心にしながら、同時に、そのようなキリスト教徒の思索(神学思想)に強い関心を持つ仏教徒の参加するところで、「キリスト教は仏教から何を学べるか」を問うたものである。

五つのセッションのプログラムは、「相即神学への道」(本多正昭、コメント―西村恵信)、「キリスト教と仏教――対話はどこで可能か――」(小田垣雅也、コメント―ハンス・ヴァルデンフェルス)、「浄土教・キリスト教の相互転換における方法論と可能性―親鸞浄土教の視座」(武田龍精、コメント―ルイス・ゴメス)、「聖霊と場所――聖

霊神学の基礎づけ――」（小野寺功、コメント石脇慶總）、「直接経験の言語化について」（八木誠一、コメント―河波昌）である。

「〔仏教に学んで神学するという〕このような試みが日本の神学界においてあまり注目されておらず、日本におけるキリスト教の神学の本流に対してほとんど影響を及ぼしていない感じがする」なかで、今までの対話に対する振り返りがなされる。「所得」（確かな結果）が得られているのか、仏教の理論に大いに依存しながら、キリスト教のメッセージに本当に忠実であるのか、このような神学的傾向にどれくらいの将来性があるのか。このような問題意識を背景にしながら、これまでの「仏教に学んで神学する」関心の特徴が次のようにまとめられている（ヤン・ヴァン・ブラフト「オリエンテーション」）。

日本人のキリスト者は、キリスト教が身につけてきた西洋的知的衣が東洋人・日本人としての自分に合わないと感じ、自分の信仰のより日本的地盤を見つけようとする（土着の動機）。また、自分がキリスト者としてそれに囲まれて生きている仏教への神学的通路・橋渡しを作ろうと願う（対話的動機）。その場合、主に、「大乗の中でも仏性に重点を置く仏教、または、空をすべての根本原理にする大乗仏教」が関心事となっている。そして、そのようなところで、キリスト教を〔西欧世界における歴史的姿の特徴である〕ギリシア的とらわれから解放しようという関心がはたらいている。そして、ブラフト氏は、言う。

①霊的事実（西田幾多郎が「心霊上の事実」と呼んだもの）を理解し、表現しようとする際に、ギリシア的論理より、仏教的論理の方が適切である。

②仏教における縁起説というものは極めて重要な考え方である。ただし、空と同一視された縁起、すなわち万物の自性（self-being）を完全に無化する相互関係性という考え方は、「他」（他性、alterity）が大きな役割を果たすキリスト教には、そのままでは取り入れられない（したがって、「無即愛」という公式は誤解を招く）。

③仏教の思想に学ぶことで、従来のキリスト教神学においてあまりに二元論的に考えられてきた事柄（例えば、信仰と知恵、神を知ることと自己を知ること、宗教における客観と主観、等）の相互依存の側面を明らかにすることができる。

④キリスト教の「教」と「行」は、その構造や内容において、ギリシア的「有」の哲学によって理論化して説明できる以上の深い否定性を含んでいる。

⑤神の本質を考えるときに、「有」という範疇のみでは不十分で、同時に「無」という範疇にも積極的な役割を与えなければならない。ただし、同じく、神のことは「無」だけからも考えられない（それを「絶対無」と名付けても）。

(三)〈東洋と西洋〉という関心

〈仏教とキリスト教〉という関心は、〈東洋と西洋〉（の宗教・文化・思惟形態など）を対比的に考察する関心と同義的に用いられてもきた。宗教としての仏教・キリスト教が、それぞれ、〈東洋の宗教〉〈西洋の宗教〉にとどまるものでないことは自明であるが、また、両宗教の主たる歴史的展開の舞台が、それぞれ、東洋・西洋であったこと、否、それ以上に、むしろ、東洋的な文化、西洋的な文化そのものが（極めて多様かつ多義的でありつつも）、それぞれ、両宗教に大きく規定されていることも事実である。それゆえ、仏教（大乗仏教、禅仏教、浄土門仏教など）に〈東洋〉を、キリスト教（ヨーロッパ・キリスト教）に〈西洋〉を、代表させて見る議論にも一定の意義があると言えるだろう。

西田幾多郎の哲学、それを継承する哲学（西田哲学、京都学派の宗教哲学等々との表現が使われてきた）への関心、特に、キリスト教徒（神学者）のそれへの関心なども、同じような文脈で表現されてきた。キリスト教神学における「宗教の神学」のひとつの関心形態でもある。そこでの関心事は、宗教としてのキリスト教／仏教、その宗教ととも

に展開してきた宗教文化（ヨーロッパ・キリスト教社会の文化、〈東洋〉〈日本〉文化など）など、きわめて多様である。また、関心主体（〈ヨーロッパ・キリスト教徒〉〈日本・仏教徒〉等々）も、きわめて多様である。

「人類は、いまや、倫理・宗教・経験科学の可能性の新たな地平に立っており、その可能性を有意義ならしめるためには、仏教徒とキリスト教徒との間の葛藤や競争、単なる寛容を超えて行かねばならない」[1]と認識する仏教徒・キリスト教徒による、「仏教とキリスト教の対話」への多様な試みは、一九八〇年代において、本格的な形を与えられてきた[2]。この一連の文脈においては、「仏教とキリスト教（の出会い・対話）」と「東洋と西洋（それぞれの宗教・文化・思想の出会い・対話）」とが融合的一体的に理解されている。そして、そのような文脈における最も重要な思想家として西谷啓治は位置づけられている。西谷（宗教）哲学は、まさしく「佛教とキリスト教との歴史的な出会いという出来事を体現している」（水垣渉「西谷宗教哲学におけるキリスト教」（京都宗教哲学会編『宗教哲学研究』第十号、一九九三年、一四頁）。と言えるであろう。もちろん、西谷の思想だけが関心事とされているわけではないし、また、西谷哲学の関心は、東洋と西洋、仏教とキリスト教、の比較が主たるものではない。西谷哲学において、「仏教とキリスト教」「東洋と西洋」は自ずから関心事とされていることがらの一側面である。西谷哲学はそれ自身として一つの独自な思索である。ただ、西谷哲学ほど「東洋と西洋」「仏教とキリスト教」を深く広く思索するものは他に見いだされないのではないだろうか。そのことが西谷哲学を「東洋と西洋」「仏教とキリスト教」という関心の象徴的存在たらしめていると言えよう。

①Buddhist—Christian Dialogue, Mutual Renewal and Transformation, ed. by P.O.Ingram, F.J.Streng, Honolulu, 1986, p.2

②注①の書物は、ハワイ大学の the East—West Religions Project に基づくものである。その企画（運動）の流れが発展して、Sociey for Buddhist—Christian Studies が（それまでの流れを承けているので第三回大会と位置づけ

られて）一九八七年に結成されている。

㈣ 〈仏教・宗教哲学・思想〉的関心から

〈仏教〉に軸足を置く論者の関心の在り様は多様で、〈キリスト教〉側に見られるような「宗教の教学（神学）」的関心に直接的に対応しているわけではない。〈東洋と西洋〉という関心のなかでの〈仏教〉側に位置するものではあるが、広い意味での哲学的関心のなかで〈仏教〉（の或る要素）を背景基盤とする思索としてなされるというのが特徴と言えるだろう。〈仏教とキリスト教〉において関心の焦点が当てられるのは、禅や念仏（浄土教、浄土真宗）、密教などが多い。いずれも、〈キリスト教〉側におけるカトリック、プロテスタント、神秘主義などとの類似性親縁性が注目されるからであろう。

『浄土教とキリスト教　比較宗教哲学論集』（峰島旭雄編）を見よう。論文集であるがゆえに、関心の有り様の特徴が見て取れるものである。仏教（浄土教）・キリスト教（カトリック・プロテスタント）・宗教哲学・宗教学・西洋哲学（ギリシア哲学・中世哲学・実存哲学）・思想史などを専攻する執筆者が〈浄土教とキリスト教〉とのテーマの下、自由に論じている。それらは、啓示や人格など〈浄土教とキリスト教〉にまつわる根本問題、〈往生と終末〉の問題、実存思想（キェルケゴールやハイデッガー）との連関での問題、倫理性の問題などにグループ化されている。

岩本泰波『キリスト教と仏教の対比』（創文社、一九七四）を見よう。同書の基本的立場は、キリスト教、あるいは、仏教のいずれかの信に立つ（軸足を置く）ような関心ではない。著者は言う。

「本書の全章を貫く基調は「人間」の問題である。しかし、ここで探究されねばならない「人間」とは、単に「人間における人間」ではない。……その限界に閉じこめられて、「根源」にかかわって問われる〝あらわな〟人間ではありえないからである。……本書の全章は、宗教が把握する「人間」における幾つかの「根源」との相

関の重要な問題について論究を試みる」（岩本泰波『キリスト教と仏教の対比』創文社、昭和四十九年、一頁）著者は、「言葉」が「根源」の〝はたらき〟である限り、それは、どこまでも「パウロの言葉」であり、「親鸞の言葉」であることにおいて、それがそのままに、「根源」の自開であらねばならないのである。そして、このようなものとしての両者における「言葉」が、それぞれにその独自性のままに、そこで〝出会う〟「場」ともいうべきものが、ここでの「対比」の内容とならねばならないものなのである、と述べ、自らの思索のことがらとその方法論を「対比」と性格づける。そして、「罪（ἁμαρτία）」と「罪業」、「神の言への反逆」と「如来の願よりの逸脱」、「福音を拒む罪」と「誓願疑惑」、「十字架の死」と「寂滅」、「愛（ἀγάπη）」と「慈悲」という「対比」を論じる。

どこまでも「人間」の立場に立って、「パウロの言葉」「親鸞の言葉」に顕われてくるような「根源」〝根源の自開〟に参入しようとする関心がそこにはある。仏教を基盤背景とするなかで哲学者思想家として〈仏教とキリスト教〉（の対比）を思索するのである

〈仏教とキリスト教〉との関心は、日本での宗教（特に仏教）・哲学思想との連関のなかでの関心事であるところに特徴が見いだされる。西田幾多郎や西谷啓治等は、西洋思想（ギリシア哲学、近世哲学、キリスト教等）を学ぶなかで仏教思想（東洋・日本思想等）を背景基盤とした哲学的思索を展開させていった。そこには、おのずから、西洋思想・キリスト教等に比して独自な思索が見いだされるので、〈仏教とキリスト教〉（の出会い、対話等）との関心は、〈西田哲学〉（京都学派の哲学、宗教哲学等）への関心とも重なると言えるのである。また、〈西田哲学〉等との連関において、〈禅仏教〉、〈浄土門仏教〉（特に法然、親鸞など）への関心が見いだされるのも特徴的と言える。

このような〈仏教とキリスト教〉という関心は、明治期以来の〈西洋・近代の思想・文化〉との出会い（摂取・対決・葛藤）経験にまで遡ってみることができる。

(五) 〈仏教とキリスト教〉——葛藤から対話へ——

一九八七年に出版された『日本における仏教とキリスト教——葛藤から対話へ、一八五四年—一八九九年』(Notto R. Thelle, Buddhism and Chrstianity in Japan: from conflict to dialogue, 1854-1899, University of Hawaii Press, 1987) に注目してみよう。「宗教間の関係が外交／外国との関係と深く絡んでいるとの観点」(序言、p. viii) から一八五四・安政元年(ペリー来航の年)から一八九九・明治三十二年までの区切りがなされている。日本が外からの力を受けて、それに対応する国家運営をしなければならないような状況のなかでの〈仏教とキリスト教〉関係が考察される。日本における〈仏教とキリスト教〉の歴史的経験は、十五世紀末から十七世紀にかけての〈キリシタン〉時代にまでさかのぼるが、長い禁制期を経た後、幕末・明治初期頃から、今日にまでいたる〈仏教とキリスト教〉関係が事実上始まったといえよう。

「日本における仏教とキリスト教—葛藤から対話へ」という書名には、著者の関心が象徴的に表現されている。著者のノットー・テレは、一九四一年に香港でノルウェー人宣教師の子として生まれた。自身も、宣教師として長く日本で活動、七〇・八〇年代の「宗教多元主義」(pluralism) の関心のもと、仏教や神道との対話に従事してきた人である。二十世紀後半の〈仏教とキリスト教〉という問題連関の背景あるいは淵源ともいえる十九世紀後半期の〈仏教とキリスト教〉関係を関心事とするのは、ゆえなきことではないだろう。著者は、〈仏教とキリスト教〉関係を二つの側面から見ている。一つは、相互の猜疑心、仏教者によるキリスト教反対運動、排撃運動(排耶論・仏教護法論)であり、第二は、開明的な仏教者・キリスト者による相互認識(承認)と尊敬(寛容な態度)が、仏教者・キリスト者の個人的な友好関係を通して醸成されていったことである。

キリスト教徒の伝道活動がなされていき、「大教院」の廃止過程での仏教各宗派の再編、教派神道や(非宗教)国

家神道の成立などによる新たな時代状況のなかで、〈仏耶接近〉の雰囲気も高まり、諸宗教の代表者による「宗教家懇談会」が開催された（一八九六（明治二十九）年九月二十六日、神道二名、仏教十九名、基督教十六名、無所属五名、計四十二名の参加）。この「宗教家懇談会」は、シカゴ「万国宗教会議」（一八九三年）での諸宗教協調の影響で実現した「日本版」とも言える（鈴木範久『明治宗教思潮の研究―宗教学事始』東京大学出版会、一九七九年、二〇七頁）。そこには、また、（日本社会での）ナショナリズム的性格、進歩主義・反「正統」主義的傾向、比較宗教学的視野の浸透なども指摘されている（日本の宗教学草創期を代表する姉崎正治も「懇談会」に出席している。鈴木範久、二四六頁）。

「万国宗教会議」（The World's Congress of Religions）は、コロンブス・アメリカ大陸到着四百年記念のシカゴ万国博覧会の一環として開催されたものである。地球規模でのさまざまな宗教の代表者が参加したもので、宗教史上、極めて重要で記念すべき出来事である。日本からは、仏教―釈宗演（臨済宗）・土宜法竜（真言宗）・芦津実全（天台宗）・八淵蟠竜（浄土真宗本願寺派）・平井金三（英学者）、神道―柴田禮一（実行教）、キリスト教―小崎弘道が参加している。釈宗演や土宜法竜の講演、平井金三のキリスト教批判は大きな反響を呼んだと言われる。釈宗演の講演を英訳した鈴木大拙は、その後、海外での活動をするようになり、その後の〈禅仏教〉の普及に大きな貢献をしたことは周知の通りである。「本会議はアジア・東洋の宗教や精神文化を西洋社会に知らしめるターニング・ポイント」であったが、また、「主催した西洋側にはキリスト教的宗教観によって植民地支配下の非西洋精神文明を包み込もうとする意図も見え隠れしており、結果的に今日まで続く諸宗教間の大きな問題を提起する機会」であった（『万国宗教会議と現代のアメリカ』別冊日本語解説、足羽與志子解説、二〇〇六年、での指摘。森孝一「シカゴ万国宗教会議―一八九三年」『同志社アメリカ研究』第二六号、一九九〇年、参考）。

一八九三年の「万国宗教会議」は、二十世紀後半における〈諸宗教間対話〉の関心の先駆的なものとみなすことが

できる。小論で注目する〈仏教とキリスト教〉の諸書は多く二十世紀後半に登場しているが、それらにおける関心の淵源は、十九世紀末・二十世紀初頭にまで遡ると言える。〈京都学派〉の（宗教）哲学思想が、〈仏教とキリスト教〉との関心において大きな比重を占めているが、〈京都学派〉の（宗教）哲学思想のいわば出発点に位置する西田幾多郎の『善の研究』は一九一一（明治四十四）年に出ている。

(六)〈仏教とキリスト教〉と題する著作群

〈仏教とキリスト教〉との表題を持つ書物を出版年順に整理した。主に、一九七〇・八〇年代に多く見られる。それらの著者の多くは、〈仏教とキリスト教〉という問題意識・関心を、五〇・六〇年代に学び始めている。その学び・研究の成果が七〇・八〇年代に多く出版されてきたとも言えよう。ここでは、直接、〈仏教とキリスト教〉（の趣旨）を題名とするものに限った。『聖霊の神学』（小野寺功、春風社、二〇〇三年）、『絶対無の哲学　西田哲学研究入門』（花岡永子、世界思想社、二〇〇二年）、『「自己と世界」の問題　絶対無の視点から』（花岡永子、星雲社、二〇〇五年）などのように、直接、表題に〈仏教とキリスト教〉との語句が入っていないが、実質的に〈仏教とキリスト教〉を関心事としているものは最小限あげることとした。ただ、広義の意味で〈仏教とキリスト教〉を関心事とする書や論文は数多いので、ここにはあげなかった。欧文文献に関しては、日本での〈仏教とキリスト教〉関心と直接的に関係するものを中心とした。広義の意味で関連するものは邦語文献以上に多いのではあるが。

●一九六〇年以前

『佛教とキリスト教』（鈴木大拙、法藏館、一九四九年）

●一九六〇年代

『宗教とは何か』（西谷啓治、創文社、一九六一年）
『文化と宗教』（P・ティリッヒ〔来日記念講演集〕、岩波書店、一九六二年）
『仏教とキリスト教』（滝沢克己、法藏館、一九六四、六六年）
『キリスト教徒仏教徒対話』（P・ティリッヒ、丁野正之助訳、桜楓社、一九六七年）
『仏教とキリスト教の比較研究』（増谷文雄、筑摩書房、一九六八年）

●一九七〇年代

『仏教とキリスト教の根本問題』（滝沢克己、法藏館、一九七三年）（滝沢克己著作集7）
『宗教の対話　キリスト教と日本の諸宗教』（マタイス・井上英治・門脇佳吉編、創文社、一九七三年）
『キリスト教と仏教の対比』（岩本泰波、創文社、一九七四年）
『浄土真宗とキリスト教』（石田充之・滝沢克己編、法藏館、一九七四年）
『禅とキリスト教』（エノミヤ・ラサール、柴田健策訳、春秋社、一九七四年）
『仏教とキリスト教との邂逅』（ハインリッヒ・デュモリン、西村恵信訳、春秋社、一九七五年）
『仏教とキリスト教の接点』（八木誠一、法藏館、一九七五年）
『カトリックと禅』河出書房新社（朝日カルチャーセンター講座現代人の宗教／丸山照雄編、一九七六年）
『浄土教とキリスト教　比較宗教哲学論集』（峰島旭雄編、山喜房佛書林、一九七七年）
『宗教体験と言葉　仏教とキリスト教との対話』（南山宗教文化研究所編、紀伊国屋書店、一九七八年）
『続　仏教とキリスト教』（滝沢克己、法藏館、一九七九年）

『比較思想序説　仏教的「即」の論理とキリスト教』（本多正昭、法律文化社、一九七九年）

●一九八〇年代

『仏教とキリスト教　滝沢克己との対話を求めて』八木誠一・阿部正雄編著、三一書房、一九八一年）
『絶対無と神　西田・田辺哲学の伝統とキリスト教』（春秋社、一九八一年）
『仏教とキリスト教』（増谷文雄、角川書店、一九八一年）（増谷文雄著作集2）
『パウロ・親鸞・イエス・禅』（八木誠一、法藏館、一九八三年）
『歴史のイエスを語る　キリスト教と仏教の対話のために』（八木誠一・秋月龍珉、春秋社、一九八四年）
『親鸞とキリスト教　現代人に信仰を問う』（門脇佳吉編、創元社、一九八四年）
『パウロと親鸞』（国分敬治、法藏館、一九八四年）
『禅　東から西へ』（エルンスト・ベンツ、柴田健策・榎木真吉訳、春秋社、一九八四年）
『東と西　永遠の道　仏教哲学・比較哲学論集』（北山淳友・峰島旭雄監訳、北樹出版、一九八五年）
『東西宗教の出会い　海外キリスト者の仏教観』（本多正昭編、創言社、一九八五年）
『カトリックと禅』（門脇佳吉他著、御茶の水書房、一九八六年）
『絶対無　仏教とキリスト教の対話の基礎づけ』（ヴァルデンフェルス、松山康國・川村永子訳、法藏館、一九八六年）
『比較思想から見た仏教』（中村元著、春日屋伸昌編訳、東方出版、一九八七年、中村元英文論集翻訳シリーズ）
『親鸞とルター　信仰の宗教学的考察』（加藤智見、早稲田大学出版部、一九八七年）
『仏教的キリスト教の真理――信心決定の新時代に向けて』（延原時行、行路社、一九八七年、九九年）

『キリスト教と西田哲学』（川村永子、新教出版社、一九八八年）
『親鸞とパウロ　異質の信』（真木由香子、教文館、一九八八年）
『フロント構造の哲学　仏教とキリスト教の相互理解のために』（八木誠一、法藏館、一九八八年）
『天台仏教とキリスト教　宗教における理と行』（南山宗教文化研究所編、春秋社、一九八八年）
『親鸞とキリスト教の出会いから　日本的解放の霊性』（ルベン・アビト、明石書店、一九八九年）
『禅とイエス・キリスト　徹底討議』（八木誠一・秋月龍珉、青土社、一九八九年）
『親鸞とパウロ　徹底討議』（八木誠一、秋月龍珉、青土社、一九八九年）
『比較思想の旅　アメリカで仏教を教える』（峰島旭雄、北樹出版、一九八九年）
『パウロと親鸞』（佐古純一郎、朝文社、一九八九年）

●一九九〇年代

『親鸞とキリスト教　土居真俊対話集』（法藏館、一九九〇年）
『浄土教とキリスト教　宗教における救済と自覚』春秋社、一九九〇年）
『聖書と親鸞の読み方　解放の神学と運動の教学』（ルベン・アビト、玉光順正、明石書店、一九九〇年）
『浄土教とキリスト教　宗教における救済と自覚』南山宗教文化研究所編、春秋社、一九九〇年）
『ダンマが露わになるとき　仏教とキリスト教の宗教哲学的対話』（八木誠一・秋月龍珉、青土社、一九九〇年）
『宗教と世界の痛み　仏教・キリスト教の心髄を求めて』（ルベン・アビト、明石書店、一九九一年）
『禅仏教とキリスト教神秘主義』（門脇佳吉、岩波書店、一九九一年）
『神の死と誕生「即」の展開を求めて』（本多正昭著、行路社、一九九二年）

『インドの叡智とキリスト教』（ヘルマン・ベック著、西川隆範訳、平河出版社、一九九二年）
『蓮如とルター　宗教教団の原点』（加藤智見、法藏館）
『禅と宗教哲学』（川村永子、北樹出版）
『宗教と文化　諸宗教の対話』（南山大学南山宗教文化研究所、人文書院、一九九四年）
『身の形而上学　道元と聖書における「智慧に満ちた全身」論』門脇佳吉、岩波書店、一九九四年）
『慈悲・身体・智慧』（上智大学東洋宗教研究所編、春秋社、一九九四年）
『絶対無と場所　鈴木禅学と西田哲学』（秋月龍珉、青土社、一九九六年）
『至誠心の神学　東西融合文明論の試み』（延原時行、行路社、一九九七年）
『日本の宗教とキリストの道』（門脇佳吉、岩波書店、一九九七年）
『宗教哲学の根源的探究』（花岡永子、学文社、一九九八年）
『「信」の思想　親鸞とアウグスティヌス』（伊藤益、北樹出版、一九九八年）
『親鸞浄土教とキリスト教』（親鸞思想と現代世界―2、武田龍精編著、龍谷大学仏教文化研究所、一九九六年）

●二〇〇〇年代
『仏教とキリスト教の対話』（マールブルク大学神学部・大谷大学）
1．『浄土真宗と福音主義神学』　第三回国際ルードルフ・オットー・シンポジオン
ハンスーマルティン・バールト、マイケル・パイ、箕浦恵了編、法藏館、二〇〇〇年
2．『浄土真宗と福音主義の信仰』
ハンスーマルティン・バールト教授、ゲルハルト・マルセル・マルティン教授を迎えて

マイケル・パイ、宮下晴輝、箕浦恵了編、法藏館、二〇〇二年
3.『浄土真宗と福音主義の信仰』　世俗化からの挑戦に直面する仏教とキリスト教
ハンス＝マルティン・バールト［ほか］編、法藏館、二〇〇四年
『ホワイトヘッドと西田哲学の「あいだ」　仏教的キリスト教哲学の構想』（延原時行、法藏館、二〇〇一年）
『仏教とキリスト教　宗教哲学論文集』（岩本泰波、岩本泰波先生記念文集編集委員会編、広大会出版、二〇〇一年）
『神秘主義　キリスト教と仏教』（鈴木大拙著、坂東性純・清水守拙訳、岩波書店、二〇〇四年）
『仏教とキリスト教　比較思想論』（芹川博通、北樹出版、二〇〇七年）

欧文（英独語）

●一九七〇年代

Christianity meets Buddhism (Heinrich Dumoulin, tr. by John C. Maraldo, La Salle, Ill., Open Court Pub. Co., 1974.（邦訳、一九七五年）

Hans Waldenfels, Absolutes Nichts, Zur Grundlegung des Dialogs zwischen Buddhismus und Christentum, Herder, 1976.（邦訳、一九八六年）

Lynn A. de Silva, The problem of the self in Buddhism and Christianity, new ed., Macmillan, 1979.

●一九八〇年代

Fritz Buri, *Der Buddha-Christus als der Herr des wahren Selbst, Die Religionsphilosophie der Kyoto-Schule und das Christentum*, Bern, 1982.

John B. Cobb Jr., Beyond dialogue, toward a mutual transformation of Christianty and Buddhism, Fortress Press, 1983.（邦訳' 一九八五年）

Buddhist-Christian Dialogue, Mutual Renewal and Transformation, Univ. of Hawaii Press, edited by Paul O. Ingram, Frederick J. Streng, 1988.

Joseph J. Spae, Buddhist-Christian empathy, Chicago Institute of Theology and Culture. Tokyo: Oriens Institute for Religious Research, 1980.

Georg Siegmund, Buddhism and Christianity: a preface to dialogue, translated by Mary Frances McCarthy, University of Alabama Press, c1980.

von Christiane Langer-Kaneko. Das Reine Land: zur Begegnung von Amida-Buddhismus und Christentum, E. J. Brill, 1986.

Notto R. Thelle, Buddhism and Christianity in Japan, from conflict to dialogue, 1854–1899, University of Hawaii Press, 1987.

The Christ and Bodhisattva, edited by Donald S. Lopez, Jr., and Steven C. Rockefeller.-Albany: State University of New York Press, 1987.

Japanese Buddhism, its tradition, new religions and interaction with Christianity, edited by Minoru Kiyota, assisted by Byron Eashart, Paul Griffiths, and James Heisig.-Tokyo; Los Angeles: Buddhist Books International, 1987.

●一九九〇年代

Perry Schmidt-Leukel, Den Löwen brüllen hören, 1993

Ninian Smart, *Buddhism and Christianity*, 1993.

Michael von Brück/Whalen Lai, *Buddhismus und Christentum*, 1997.

William Johnston, The mirror mind, Zen-Christian dialogue, Fordham University Press, 1990.

The Emptying God, a Buddhist-Christian conversation, edited by by John B.Cobb, Jr. and Christopher Ives.-Maryknoll, N.Y., 1990.

Leo D.Lefebure, The Buddha and the Christ, explorations in Buddhist and Christian dialogue, Maryknoll, N.Y. 1993.

Russell H.Bowers, Jr., Someone or nothing? Nishitani's Religion and nothingness as a foundation for Chistian-Buddhist dialogue, Peter Lang, 1995.

The sound of liberating truth: Buddhist-Christian dialogues in honor of Frederick J.Streng, edited by Sallie B.King and Paul O.Ingram, Curzon, 1999.

●11000年代

Rita M.Cross and Rosemary Radford Ruether, Religious feminism and the future of the planet: a Christian-Buddhist conversation, Continum, 2001.

The greening of interreligious dialogue between Christianity and Buddhism for flourishing of the oppressed others: paticularly focusing on sallie mcfague's embodiment theology and Joanna Macy's engaged buddhology/by Sung Yong Park.-Ann Arbor, Mich.: UMI Dissertation Services, c2001.-(UMI dissertation

services).
Kenneth Fleming, Asian Christian theologians in dialogue with Buddhism, Peter Lang, 2002.
The transforming spiritual landscape, Buddhist-Christian encounters/edited by Ronald Y. Nakasone. Dharma Cloud Publishers, 2005.

（付記）小論は、龍谷大学仏教文化研究所・二〇〇七年度個人研究「〈仏教とキリスト教〉・対話的関心の諸相――その歴史的諸形態を概観する――」の研究途上における中間報告的なものである。〈仏教とキリスト教〉との対話的関心による著作群に見いだされる思索に共有されている（論者たちが共有しようとしている）パースペクティブを求めることに他ならない。そのような意味で、文字通りの研究序説にすぎないものである。

キーワード　仏教とキリスト教　宗教対話　宗教の神学（教学）